

ザ・キー 上

サイモン・トイン 著 Simon Toyne

土屋 晃 訳 Akira Tsuchiya



アルファポリス文庫

ロキシーに
(十一歳になったら読めるから)

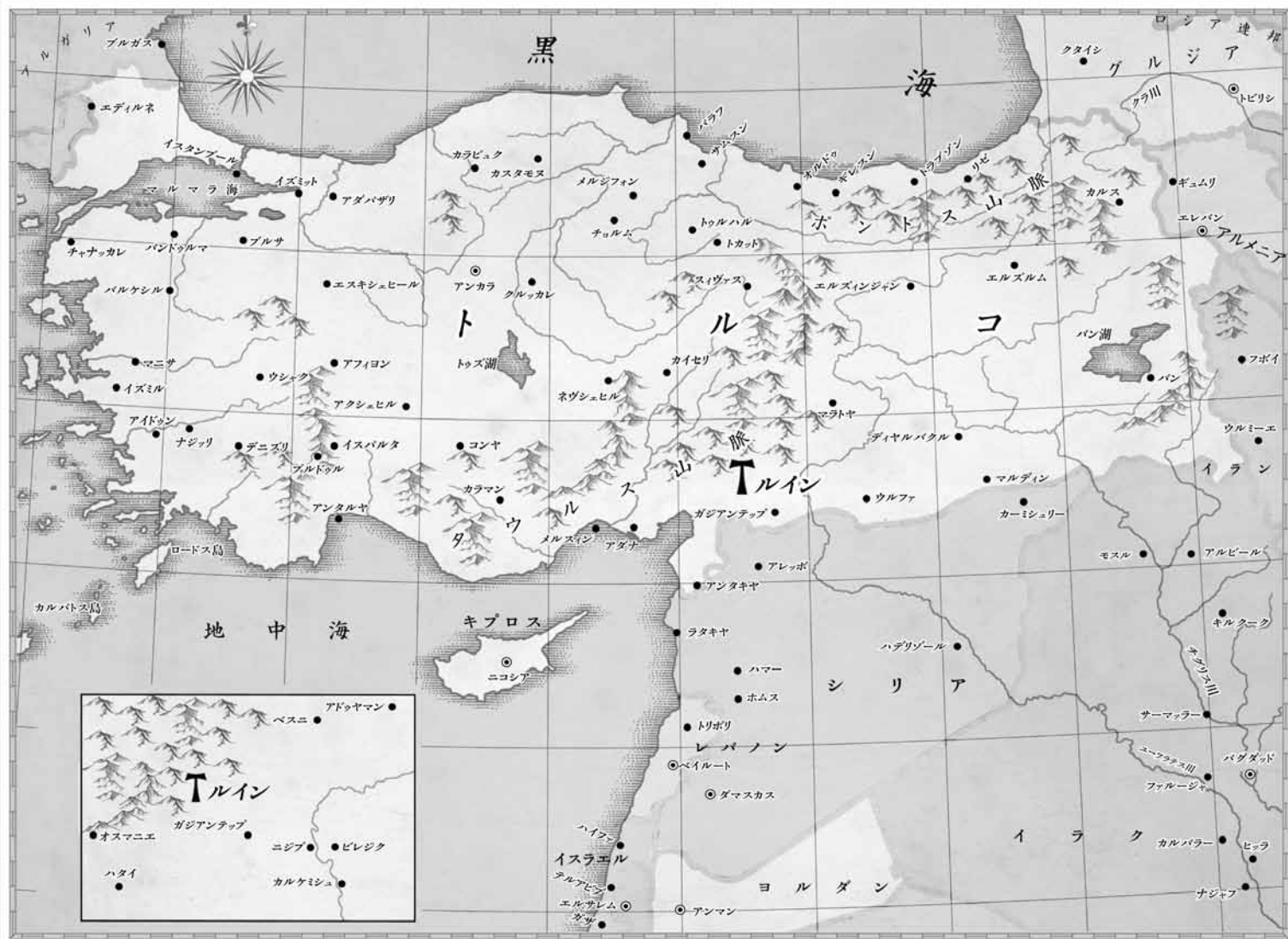
THE KEY

by Simon Toyne

Copyright © Simon Toyne 2012

Simon Toyne asserts the moral right
to be identified as the author of this work

Japanese translation rights arranged with
Scarlet Puppy Productions Ltd care of
INTERCONTINENTAL LITERARY AGENCY LTD
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.



I

突然、激しい風が吹いてきたような音が
天から起ってきて……
一同は聖霊に満たされ、
いろいろの他国の言葉で語り出した……

—— 欽定訳聖書 使徒行伝 第二章二節—四節

《主な登場人物》

リヴ・アダムセン……………〈インクワイアラー〉紙の記者

ガブリエル・デラクルス・マン…国際ボランティア団体^{オルトウス}〈誕生〉所属の元軍人
キャスリン・マン……………〈誕生〉の代表。ガブリエルの母
オスカル・デラクルス……………ガブリエルの祖父

マルクス・アタナシウス……………^{シタデル}城塞の修道士
アクセル……………城塞の警備兵の長
ドラガン・ルヤ……………城塞の修道士。^{サンクトゥス}〈聖なる民〉の生き残り
ガードナー……………城塞の庭園の管理者
トーマス……………城塞の神父。アタナシウスの協力者
マラキ……………城塞の神父。大図書館長

クレメンティ……………ヴァチカン市国の国務長官

ダヴウド・アルカディアン……………ルイン市警察の警部補
バーソロミュー・ライス……………ルイン市警察の客員病理学者

ミリアム・アナタ……………ルインの研究者

^{アンシャープ}幽霊……………^{ベドウィン}遊牧民の盗賊
ハイド……………掘削施設の保安主任

サミュエル・ニュートン……………謎の死を遂げた城塞の修道士。リヴの兄

1

中央イラク バービル県ヒッラ

砂で洗われた窓越しに、砂漠の戦士は外を見つめていた。ゴーグルで目を隠し、顔のほかの部分は頭巾で覆われている。窓外では何もかもが骨のように白く色褪せる。建物も瓦礫も——人でさえも。

戦士が注目していたのは、カフイエで砂塵を防ぎながら通りの反対側をぎこちなく歩く男である。白い空に真昼の太陽が高く昇り、気温が摂氏五十度に達しようかという時間帯に、町のこの付近に行く者は多くない。たまさか通りかかる人間にしても足早になる。

背後にあたる建物の奥のほうから、重く鈍い音とくぐもった呻き声が聞こえた。通行人の耳に届いた気配はないかとうかがったものの、男は自動小銃による銃火や手榴

弾の爆発であばたのように割れた壁の陰に張りつき、ひたすら歩きつづけている。戦士は通行人が陽炎のなかに溶けて消えるまで見とどけ、室内に注意をもどした。

その事務所は町はずれの工場の一角にあった。油と汗と安煙草の臭いがした。壁に掛けられた額装の写真の被写体は、あたりを埋める油染みた書類やエンジン部品を誇らしげに眺めているように見える。部屋は机と椅子を二脚置いて、かさばるエアコン一台で程よく温度を保てるぐらいの広さがあった。が、それもあくまでエアコンが動いていればの話。いまは停止している。オーヴンさながらの室内だった。

都市は解放の数ある代償のひとつとして、何カ月にもわたり停電に悩まされていた人々はサダム・フセイン政権を、さっそく古き佳き時代とばかりに語りだしている。たしかに、行方不明の人間が出ることはあったかもしれないが、少なくとも電気は点いていた。忘却の早さとはかくもすさまじい。砂漠の戦士はなにも忘れていなかった。フセイン時代からの無頼で、現在の占領下でも無頼のまま。彼の忠誠心はこの土地に向けられている。

新たに聞こえてきた苦悶の声に、戦士は現実にも引きもどされた。探している石を早く見つけ、つぎの巡回が来るまえに砂漠に姿を消したいと思いながら引出しを空にし、

食器棚をあげた。だが石を持つ男は明らかにその価値を知っている。ここには痕跡のひとつも残されていなかった。

彼は壁の写真をはずして手に取った。サダム・フセインを彷彿させる太い黒いひげは、ふくよかな体軀のせいで目立たない。不幸にして父親から受け継いだ顔に、はにかんだ笑みを浮かべるふたりの少女に手をまわす男の民族衣装は、腹のあたりではちきれそうだ。三人が寄りかかる白い四輪駆動車は、いまは工場の前庭に駐めてある。その車を見やり、冷えていくエンジンの洩らす音を聞き、その上で揺れる熱い空気と、暗色のフロントグラスの中央下部にある特徴的な円を認めた。戦士は写真を手に笑顔で近づいていった。

作業場は建物の後部全体を占めていた。事務所より暗く、それでいて同じぐらい暑い。天井からはネオン管が意味なく下がり、隅の扇風機は微動だにしない。奥の壁の高い位置に細い窓が二枚あって、そこから射す明るい光が、とても持ちこたえられそうにない細い鎖で吊られたエンジンブロックに降りそそぐ。その下で、写真の肥った男が鉄条網で作業台に縛りつけられ、息を喘がせていた。腰まで服を脱がされ、露出

したでつぶりと毛深い腹が、苦勞して呼吸をするたび上下する。折れた鼻は出血して、片目はつぶれて開かない。汗でぬめる肌に鉄条網がふれる場所から真つ赤な血が流れだしていた。

立ちほだかる埃っぽい戦闘服の男の顔も、やはりカファイエとゴーグルで判然としない。

「どこにある？」その男は血に濡れたタイヤレバーをゆっくり振りあげた。

肥った男は声もなく首を振るばかりで、新たな痛みへの予感に呼吸を乱した。鼻水と鼻血が泡となって口ひげに浸みこんでいく。男はまともなほうの目をつぶった。タイヤレバーがさらに持ちあがる。

そこに砂漠の戦士がはいってきた。

肥った男はまた殴られるのを覚悟して、歯を食いしばったままだった。何も起きないので片目を開くと、ふたりの男が立っていた。

「あんたの娘か？」新しく来た男が写真を掲げた。「可愛いな。この娘たちなら、お父さんがどこに物を隠しているか教えてくれそうだ」

紙やすりで石を削るような声だった。

肥った男はその声に気づくと、砂漠の戦士がゆっくりとカファイエを解き、防砂用ゴーグルをはずしていくのを恐怖のまなざしで見つめた。一条の陽光のなかに身を乗り出した戦士の瞳孔が収縮し、ほとんど灰色にしか見えない瞳の中心で黒い点と化した。肥った男はその独特の色を見ると、戦士の喉もとで円を描くぎざついた傷痕に視線を移した。

「私がわかるか？」

男はうなずいた。

「言ってみろ」

「アッシャーバ。あんたは……^{アッシャーバ}〈幽霊〉だ」

「なら、私がここにいる理由もわかるな？」

もう一度うなずく。

「じゃあ、どこにあるか答えてもらおうか。それとも、このエンジンをあんたの脳天に落としてから、娘たちを連れてきて新しい家族写真の撮影をはじめようがいいかな？」

家族のことを持ち出されて、男の反抗心が燃えあがった。「おれを殺したら、なに

も見つからないぞ。あんたが探してるものも、娘たちも。ふたりを危険な目に遭わせるぐらいなら死んだほうがまだ」

〈幽霊〉は写真を作業台に置くとポケットに手を入れ、四駆のフロントガラスから剥がしてきたポータブルのカーナビを取り出した。そのスイッチを押し、肥った男に見えるようにした。画面に最近登録した目的地のリストが表示された。上から三番めにはアラビア語で「家」をしめす文字。〈幽霊〉が指先で軽く叩くと表示が変わり、町はずれにある住宅地の街路図が出た。

たちまち肥った男の顔から闘志が消えた。男はひとつ息を吐くと、できるだけ落ち着いた声で〈幽霊〉の聞きたがっている内容を話した。

四駆はヒッラ東部をめざし、地表を交差するおびただしい運河のひとつに沿って悪路を走った。不毛の砂漠と密集する熱帯の緑樹がみごとに混在している地域である。古代メソポタミアの肥沃な三日月地帯——ふたつの川に挟まれた土地——として知られる。彼らの前方では青々とした草とナツメヤシの列が、ふたつの川のうち、チグリス川の河岸を描きだし、その奥にユーフラテス川が流れている。太古の境界に挟ま

れた地で、人類は文字や代数や車輪を發明した。エデンの園は本来ここにあったと信じられていたが、いまだ発見した者はいない。三大宗教であるイスラム教、ユダヤ教、キリスト教の父アブラハムはこの地に生まれた。《幽霊》もまたここで生を享け、忠実なる息子として母なる大地に仕えていた。

トラックは速度を落としてヤシの木立を過ぎ、容赦のない太陽に灼かれて固まった白亜の砂漠に突っ込んだ。肥った男が傷ついた肉体に走る痛みを声あげる。《幽霊》はそれを無視して、フロントグラスのむこうに瓦礫の山がぼんやり形をとりはじめるのを見つめた。その正体は何なのか、どれくらい近いのかを判断するにはまだ早い。砂漠の酷暑は距離と時間の感覚を狂わせる。褪色した地平線を見ると、それが聖書の一場面ではという気がしてくる。聖書に書かれているのと同じ、ひび割れた大地と羊皮紙を思わせる空、そこに溶けていく染みのような月。

近づくにつれ、蜃気楼がはつきりとした形を見せはじめた。最初に思ったよりずっと大きい。人間の手で築かれた二階建ての四角い建物は、おそらく遺棄された隊商宿で、かつては古の大地を旅したラクダの隊列を迎え入れていたのだろう。平たい粘土煉瓦は一千年まえと同じ太陽によって灼かれて、いまや崩壊がすすみ、元の

塵に還ろうとしている。

汝は塵なれば、と《幽霊》はその光景を見ながら思った。塵に帰るべきなり。

さらに近づく、外壁一面に散る銃痕が明らかになった。この損傷は最近のこと——反乱の証し、あるいは英軍か米軍による射撃練習によるものかもしれない。

《幽霊》は怒りに顎を引き締めながら、もし武装したイラク人がストーンヘンジやラシモア山を吹き飛ばしたら、侵略者たちはどんな気分を味わうかと考えた。

「そこだ。そこで停めてくれ」肥った男は、廃墟の主要部分から数百メートル手前にあたる小さな石塚を指さした。

運転手はそちらへ向けた車を停めた。《幽霊》は地平線を見渡し、熱い大地から立ち昇る空気の揺らめき、穏やかにそよぐヤシの葉、それから遠くの土煙に目をやった。移動中の軍隊という可能性もあるが、はるかに遠いので差し迫った問題ではない。彼は灼熱の地獄に向かってドアをあけ、人質を振り向いた。

「案内しろ」と低声で言った。

肥った男が乾ききった地面をよろめき歩くあとを、《幽霊》と運転手は忠実にたどった。男にあざむかれ、地雷を踏む危険を避けるためだった。男は積まれた石の三

メートル手前で足を止め、地面をしめした。〈幽霊〉は男が伸ばした腕の先を目で追いかすかにへこんだ地面に視線を落とした。「擬装爆弾か？」

肥った男は家族を侮辱されたといわんばかりに睨みかえた。「あたりまえだ」と言いながら、手を差し出して車のキーを要求した。そして受け取ったキーホルダーを地面に向けた。足もとのどこから、爆弾のスイッチが切れるかすかな電子音がすると、男はしゃがみこんで土を払っていき、やがてビニール袋で包まれた南京錠を掛けたハッチが現われた。男は小さな鍵を選び出し、正方形の跳ね蓋を開いた。

太陽の光が地下壕に流れこむ。肥った男は急な梯子はしごを闇のなかへ下っていった。

〈幽霊〉は構えた拳銃越しに男が梯子を降りきつて上を仰ぎ、まともなほうの目を細めるまで見守った。「懐中電灯を取る」男はそう言うとき暗闇に手を伸ばした。

〈幽霊〉は無言で、男の手が別なものを握った場合にそなえ、引き金に掛けた指に力をくわえた。暗闇に円錐形の光が灯り、自動車修理工場の持ち主の腫れあがった顔を照らした。

運転手が降りていく間に、〈幽霊〉は最後にもう一度地平線を見晴らした。土煙ははるか彼方、依然としてバグダッド方面に北上している。ほかに人の気配はない。自

分たちだけであることに納得して、暗い地中にもぐっていった。

太古の人々の手によって岩盤に掘られた地下壕は、数メートル四方の空間がひろがっていた。それぞれの壁沿いに軍隊式の棚が据え付けられ、埃から守るために厚手のポリエチレンシートが掛かっている。〈幽霊〉はシートを片側に寄せた。棚に隙間なくきっちり収められていたのは銃、それもほとんどがAK・47アサルトライフルで、いずれも戦闘で使用された際の傷が残っていた。その下には中国語、ロシア語およびアラビア語の文字がステンシルで刷られたスパムの缶が並ぶ。中身はすべて七・六二ミリ弾である。

〈幽霊〉はポリエチレンシートをめくっては棚を調べてまわった。武器や重砲弾、さらに煉瓦のようなドル紙幣の束、乾燥した葉と白い粉のはいった袋、そしてようやく——地下壕の奥に近い棚に——探していたものを見つけた。

彼は手にしたものの重さを感じながら、ゆるくるまれた粗布を、火傷をした皮膚から衣服を剥がしていくような手つきでうやうやしく開いていった。なかにあったのは平たい石板だった。石板を明かりのほうに傾けると、表面にかすかな模様が見える。指でその輪郭をなぞってみると——上下が逆さまになったTの文字。

人質に銃を向けたまま、振り向いた運転手の目が聖なる物体に吸い寄せられた。

「何て書いてあるんです?」

《幽霊》は石板に粗布を掛けた。「神々の失われた言語で書かれてる」と言いながら、赤児をあやすように包みを抱えた。「われわれが読むものじゃない、ただ守り抜くためのものだ」肥った男のほうに歩み寄り、相手の傷だらけの顔を見据える淡い色の瞳が、仄暗い光のなかで異様に輝いた。「これは大地のものだ。こんなものと一緒くたにして、棚に放り出しておくべきじゃない。どこで手に入れた?」

「羊飼いと交換した、銃二挺に弾薬と引き換えに」

「そいつの名前と居場所を教えろ」

「むこうは遊牧民だ。名前は知らない。私がラマディで仕事をしてるときに売りにきた。ほかのガラクタなんかと。砂漠で見つけたぞうだ。ほんとにそうかもしれないし、盗んだのかもしれない。とにかく、こつちでいい値段をつけた」肥った男はまともなほうの目で見あげた。「それを今度はあんたが盗むんだ」

《幽霊》はこの新しい情報を吟味した。ラマディは北へ半日車を走らせたところにある。侵攻され、占領されていた期間に抵抗運動の中心となった代表的な都市で、爆撃

により灰燼に帰し、いまなお怨嗟の空気が重く垂れこめている。またフセインの宮殿のひとつがあり、すでに掠奪されつくしている。聖遺物を持ちだすのは造作もないだろう。前大統領は窃盗とともに、国宝を私蔵することに熱心だった。「買ったのはいつごろだ?」

「十日ほどまえ、月に一度の市が立ったとき」

もはやバドウィンはどこにいてもおかしくない。羊を連れ、砂漠を数百平方キロの範囲で放浪しているのだ。《幽霊》は包みをこれ見よがしに掲げた。「こういうものに会ったら、手に入れて知らせろ。それが友になる方法だ——いいな? あんたは私が役に立つ友になれることを知ってるし、私を敵に回したくないと思ってる」

男はうなずいた。

《幽霊》はしばし睨みをきかせてからゴーグルをはめた。

「残りはどうします?」と運転手が言った。

「放っておけ。この男の生活の糧を取りあげることはない」《幽霊》は梯子に向きなおると昼光に向かって昇りだした。

「待ってくれ!」

肥った男は困惑の目を向けてきた。〈幽霊〉の慈悲深い行為にとまどつていた。

「ベドウィンの羊飼いはサッカーの赤いキャップをかぶってる。冗談で買おうと持ちかけたら怒ってた。いちばん大事にしてるんだって」

「どこのチーム？」

「マンチェスター・ユナイテッド——赤い悪魔」

2

ローマ ヴァチカン市国

国務長官のクレメンティ枢機卿^{すうききやう}は深々と煙草を吸い、不安をおぼえる身体に鎮静効果のある煙をとりこみながら、丸々と肥えた神がみずからの創造物に絶望するかのように、サンピエトロ広場をうろつく観光客を見おろした。ちょうど真下では、いくつかの集団の視線がガイドブックとクレメンティの立つ窓のあいだを行ったり来たりし

ている。クレメンティには、観光客に己^{おの}れの姿は見えないという相当な自信があった。はちきれそうな黒い枢機卿の法衣が、影に溶けこむ助けになるからである。どのみち、彼を探しているわけではない。煙草をもう一服したクレメンティは、見込みちがいに気づいた観光客の目が、彼の左手にあたる法王住居の閉じた窓にいつせいに向けられるのを見た。建物内の喫煙は禁止されていたが、ヴァチカン市国の国務長官を務めるクレメンティは、私室での他愛もない道楽が常軌を逸した職権濫用になるとは考えていなかった。普段は一日二本と自分を律していたが、きょうはちがう。昼時にもなっていないのに、すでに五本めだった。

ニコチンをふくんだ空気を最後に呑みこむと、窓敷居に置いた大理石の灰皿で煙草を揉み消し、机上に高級雑誌のようにひろげられた悪い知らせに相対した。彼の好みで、朝刊は世界地図にある国々と同じ順序に並べられる——アメリカの一般紙は左側、ロシアとオーストラリアは右側で、ヨーロッパの新聞が真ん中である。見出しはふう各紙で異なり、地元の名士や政治スキャンダルにたいする国民の関心が反映される。それがきょうはすべて同じ、あれから一週間以上も経つというのに、どの新聞もほぼ同じ写真を載せていた。トルコの古代都市ルインの中心に君臨し、〈城塞^{シタデル}〉として

知られる暗い、短刀を思わせる要害の写真である。

近世の教会でも特異な存在であるルインは、太古の力の源泉としてルルドやサンティアゴ・デ・コンポステラと並び称される、カトリック教会のなかでも有名かつ不朽の聖地だった。切り立つ山を人間の手で掘ったルインの城塞は、人が棲みつづける地球最古の建造物であり、もとはカトリック教会の中樞の座にあった。最初の聖書はこの謎めいた壁の内側で書かれ、初期の教会における最大の秘密はいまもそこにあると広く信じられている。この地をめぐる謎の多くは、沈黙を守るといふ厳しい伝統に起因する。城塞内に暮らす修道士と聖職者以外、神聖な山に足を踏み入れることは認められず、また一度入山した者は二度と外界に出られない。射眼のある高い胸壁と細い窓を持ち、なかば掘りかえされた山の維持はもっぱらその住人たちが担ってきた。やがて時は流れ、完成途中の城塞の、いまにも崩れそうな外観が都市の名の由来となった。だがその姿にもかかわらず、城塞は廃墟などではない。歴史上、一度として破られたことのない唯一の砦であり、古の宝物と秘密を独占しつづけていた。

そんなとき、一週間あまりまえのこと、ひとりの修道士が山頂に登った。テレビカメラがその一挙一動をとらえるなか、修道士は全身で「Tau」——シタデル最大の

秘密である「サクラメント神体」の象徴——を形づくり、そして頂上から飛び降りた。

修道士が非業の死を遂げたことで、世界的な反教会の感情が燃えあがり、シタデルへの直接攻撃が頂点に達した。一連の爆発がトルコの夜を切り裂き、要塞の麓に通じるトンネルの存在を明らかにした。そして史上初めて人々が——修道士十人、市民三人が程度の差こそあれ負傷して——山を降りた。以来、些細なことまで新聞紙上ににぎわしている。

クレメンティはイタリアで人気の朝刊紙（ラ・レップブリカ）を手に取ると、一面の大見出しを読んだ。

城塞の生存者最新情報

彼らは「神体」の秘密を発見したか？

どの新聞も同じ疑問を投げかけ、城塞とその悪名高い秘密にまつわる古い伝説をはじくりかえす口実として爆破事件を利用した。四世紀に権力基盤をローマに移した理由は、秘匿しておきたい過去から教会を引き離すことにあった。以降、ルインは問題

にみずから対処して秩序を保ってきた——これまでは。

クレメンティは別の新聞を取りあげた。イギリスのタブロイド紙は、シタデルの上空に浮きあがる杯とこんな見出しを掲げていた。

廢墟への道を歩む教会

。聖杯の秘密は明らかにするか？

その他の新聞はなおどぎつく、病的な面に関心をしめしていた。山を出た十三人のうち生き残ったのは五人だけで、残りは怪我が原因で死亡した事実。おびただしい数の写真——待機する救急車へ修道士たちを運ぶ、救急隊員の頭越しにフラッシュを焚いた生々しい光景。法衣カフツの緑と、儀式で刻まれた十字の傷から流れる鮮血の赤を際立たせる閃光。

何もかもが教会を狂信的で秘密主義の中世カルトに見せかける、無残な広報活動だった。好事魔多しとはいうものの、ほかにも気がかりなことが山積し、山にはこれまで以上の秘密保持を求めようとしていたクレメンティにとって、いまや状況は悲惨

なものがある。

ひとりで抱えている責任の重さを感じながら、クレメンティは椅子に腰を落とした。国務長官とはヴァチカン市国の事実上の首相であり、国内外を問わず、教会の利益に関して広範にわたる権力を有している。通常であれば、ルインの現状にはシタデルの評議会が対処する。ヴァチカン同様、ルインは独自の力と支配をおよぼす国家内国家なのだが、爆発以来、山からの音信は一切とだえていた。そしてこの沈黙こそが、騒ぎたてる世界中のマスコミよりむしろクレメンティの気持ちをかき乱しているのである。それはルインの目下の危機が、非常に大きな懸念事項であることを意味する。

クレメンティは新聞の海をまたぐようにしてキーボードを叩いた。すでにメールの受信トレイは日常の業務であふれんばかりだったが、彼はそれをすべて無視すると、〈ルイン〉と名づけた個人フォルダをクリックした。パスワードを要求してくるプロンプトボックスに、注意深く入力する。これを間違えるとコンピュータ全体がロックされ、技術者に解除させるのに最低でも一日かかってしまう。画面に砂時計のアイコンが出て、サーバーが複雑な暗号化ソフトを処理していたが、やがて別なメールボックスが開いた。空だった——まだ何の知らせもない。件名を入れずに、新しいメッ

セージを入力した。

〈何かないのか？〉

〈送信〉をクリックし、画面から消えるのを見届けると、返信を待ちながら新聞を集めて几帳面に重ね、署名を必要とする手紙を選び分けていった。

爆発で城塞が崩れたとき、クレメンティは教会の人員を動かし、状況を注意深く監視させていた。ローマと距離を置くためにシタデルの諜者を使う一方で、山中の評議会が速やかに機能を回復し、後の始末を引き継いでくれるものと期待していた。政治家の冷静な頭で、近づく脅威に対応して兵器を展開させるべきだと考えたのである。まさか自分が発射を命令せざるをえない局面が来るなどとは思いつかなかった。

表の広場から、内部で騒ぎが噴出していることなど知るわけもなく、教会の威容に賛嘆する観光客の声が伝わってくる。ナイフでワイングラスを叩くような音がメールの到来を告げた。

〈まだなにも。九人めの修道士が死にかけているという噂があります。残りはどうしますか？〉

返信を打とうとした手がキーボード上で止まった。おそらく状況はおのずと解決する。もうひとりの僧が死ねば、残る生存者はたった四人——が、うち三人は一般市民で、母教会にたいする沈黙や従順には縛られない。彼らは何より大きな脅威だった。

机の隅に積みあげた新聞に向いた目が、見つめかえしてくる三人——女ふたりに男ひとり——の写真を捉えた。いつもなら山が長く保持してきた秘密を脅かすとして、シタデルが迅速かつ断固として彼らを処断しているだろう。しかしながらクレメンティはローマの聖職者であり、それ以上に政治家であり、直接行動を起こす立場から遠く離れたところにいる。ルインの大司教とちがって、死刑執行令状に署名することに慣れていなかった。

クレメンティは立ちあがると、決断から離れて窓辺にもどった。

この一週間、山中には生命の兆しがあった。高い窓の奥で蠟燭の灯が揺れ、煙突からは煙が昇った。彼らは早晚沈黙を破り、世界とふたたび対峙して混乱の収拾にあた

ることになる。それまでは忍耐強く、手を汚すことなく、教会の将来と教会が直面する真の危機に心を砕くのだ。ルインやその過去の秘密とは無関係に。

窓の敷居に置いた煙草に手を伸ばし、この日の六本めで決断を封印する覚悟をしようとしたとき、外の大理石の廊下を踏む革靴の音が高くなった。いつになく急ぎ足で人がやってくる。一度の鋭いノックにつづいて、困惑顔のシュナイデル司教が現われた。

「何事だ？」クレメンティの問いには、本人の意図を越えた苛立ちがにじんだ。シュナイデルは彼の個人秘書で、この痩せた職業司祭は火山に棲息するトカゲのように、白熱する火口のそばで黒焦げになることもなく、きわどく生き延びていくというタイプだった。能力に非の打ちどころはなくても、クレメンティにはどうにも心を許しがたいところがある。だが、きょうのシュナイデルは人当たりの良さが影をひそめていた。

「彼らがいらしています」

「誰だ？」

しかし返事は必要なかった。シュナイデルの表情が知るべき答えをあまさず語って

いた。

クレメンティは煙草の箱をつかんでポケットに突っ込んだ。たぶん、これから数時間吸いきってしまうことになるのだ。

3

トルコ南部 ルイン

のっぺりした灰色の空から、雨がみすばらしい亡霊のごとく吹きおろし、暮れゆく一日に残る熱を捕らえて舞った。雨雲はタウルス山脈の上空で発生すると、湿った空気を集めて東へ流れ、氷河を越え、険しい岩山に囲まれた古代都市ルインが占める丘陵に向かっていた。街の中心にそびえる城塞の切り立った頂は雲の腹を引き裂き、そこからこぼれた雨が山腹を瑞々しく輝かせ、干上がった濠のある地表に滝となって流れ落ちた。

旧市街では旅行者たちが、修道士の法衣カフツを模した赤いビニール製のお土産用の合羽をがさつかせ、丸石に足を滑らせながら、城塞へつづく狭い道を登っていた。なかには世界遺産の長いリストにチェックを入れただけの観光客もいるが、多くはより伝統的な理由のため、祈りと崇拜の見返りに心の平穏と魂の安らぎを得ようとする巡礼者たちである。先週、その数がいつにもまして多かったのは、このところの事件とともに不思議と連鎖していた自然災害の影響だった。地盤の安定している国での地震、防波堤のない国での津波、予期せぬ季節はずれの天候——いま晩春のトルコに降りしきる冷雨は、まさしくこの例にあてはまる。

滑りやすい道を登った彼らを、雲に分け入った先で出迎えるのは畏怖をおぼえる城塞の雄姿ではない。山があるはずの場所に向けて虚しく霧中を見つめる、観光客のかすむ輪郭だった。雨に煙る道を歩き、修道士が墜ちた場所に手向けられた萎れた花の祭壇を脇に見て、やがて至るのは広大な土堤の端と旅の終わりを知らせる低い壁である。

壁のむこうの、かつて水が流れていた箇所には長い草がそよぎ、そのあたりで、山裾が霧の縁から立ち昇る夜の帳とばりさながらに見えてくる。それこそ濃霧のなかを小さな手漕ぎ舟に迫る大型船といった趣きがあり、その巨大さで見る者を不安におとし入れる。大半の旅行者は早々にその場を離れ、明るい霧もやのなかを土堤の反対側に並ぶ土産物店やカフェに避難所を求めた。だがまれに低い壁近くに辛抱強くなたずみ、心に刻んだ祈りを捧げる者がいた。教会のため、暗い山とそこでひっそり暮らす男たちのためにと。

城塞内部は静まりかえっていた。

トンネルを進む者はいない。作業もおこなわれていない。厨房は人気がなく、山の中心にあたる火口部を飾る庭園も同様だった。ていねいに積まれた瓦礫や木の支柱が、トンネルの修復がなされた場所をしめしてはいたものの、そこに従事した人間はすでに移動している。大図書館に通じる気密室は、爆発による停電で室内の温度調節と保安システムが停止して以来、閉鎖されていた。いずれ復旧するという噂はあったが、その時期については誰にもわからなかった。

ほかに山が正常に復する徴候はあった。おおかたの区域に電気がもどり、祈禱と学習の当番表が全寮に貼り出された。わけても重要なのが、大司教と修道院長の遺体

を埋葬すべく、死者のためのミサが計画されたことである。ふたりの死によって山は指導者不在という空前の混乱におちいった。それがいま、山中の全員が最後の別れを告げようと、厳肅な静けさのなかをミサへ向かっていた。

ほぼ全員が。

山の高みにある〈聖なる民〉——緑の法衣を着る〈神体〉の守護者——のみの出入りを許される区域では、四人の修道士が禁制の階段を昇りきろうとしていた。

彼らもまた無言で、暗い階段を行く足取りは、まさに犯しつつある重大な不法侵入のせいでいかにも重かった。彼らを縛る古の法律は明快で、許可なくこの場に足を踏み入れる者は、山中の最大の秘密を見出そうとする者への見せしめとして処刑される。だがいまは平時ではなく、しかも彼らはふつうの僧ではなかった。

先頭に行くアクセル修道士は、ブラシのように逆立った髪とひげが、警備兵を表す赤の法衣に近い鶯色だった。すぐ後ろを歩くのは黒い法衣を着る図書館長のマラキ神父で、彼の猫背と度の強い眼鏡は、大図書館という洞で何十年も書物に親しんできた遺産である。そのつぎはトーマス神父、図書館で多くの技術革新を推し進めてきた立

役者で、神父の黒衣をまといっている。そして最後が事務方の素朴な茶色の法衣姿のアタナシウスで、城塞では一様にひげを生やしている同胞のなかにあつて、無毛でひげもない顔は異彩を放っていた。各々が特定の階層を率いていたが、アタナシウスだけは修道院長不在を埋める代理の長だった。爆発で修道院中枢にいた幹部を失って以来、四人は団結して山の運営にあたり、また彼ら自身で偉大な秘密を発見して、それを守ろうという決断を下したのだった。

最上段に達した四人が円天井の暗い小さな洞に寄り集まると、松明が荒削りな壁と異なる方向に延びる拱路を照らした。

「どっちだ？」狭い空間で、アクセル修道士の声は大きすぎるほどに響いた。これまで勝手知ったる道とばかりに先導してきたアクセルだが、ここに來て仲間と変わらぬい気後れを見せた。

本来、神体礼拝堂に安置されているものの正体は、修道生活の頂点をきわめ、晴れて〈サンクトウス〉の一員となって初めて知ることができる。ところが四人は誰の招待もなくこの場にいる。彼らの内に深く根ざす、禁断の知識を得ることへの恐怖には、心躍る部分と身のすくむ思いとが同居していた。

アクセルは松明を掲げて前に進み出た。岩を削った壁龕には蠟燭を燃やしたあとの蠟が固まっていた。アタナシウスはそれぞれの通路に灯を向けると、真ん中を指さした。「ここは蠟が多い。ほかより使われていたということだ。礼拝堂はこっちにちがない」

彼は確認も賛同も待たずに歩きだし、背をかがめて低いトンネルにはいった。三人もそれにつづいた。アタナシウスはしぶしぶ殿についた。アクセルの判断が正しいことはわかつている。ほんの数日まえ、こうして禁じられた階層をひとりで歩き、礼拝堂のおぞましさを目にしたので。いま一度、その場に立ち会う覚悟を決めた。

トンネルを行く四人の松明で照らされた岩壁には、女たちがさまざまな拷問を受ける残酷な場面が彫られていた。奥に進むにつれてその輪郭がぼやけ、すっかり消えてしまうと広い控えの間に通じていた。

松明が闇を探るあいだ、彼らは本能的に身を寄せ合った。一方の壁には、鍛冶屋にありそうな小さな炉が設えてある。煤で汚れ、床には灰が落ちているが、いまは火はいっていない。その前に円形の砥石が四個、回転させるための踏み板を付けた頑丈な木枠にはめこまれていた。その後ろの壁で、中央にTauのしるしが彫りこまれた

大きな丸石が片側に転がされ、弓形の出入口が姿を現わしていた。

「神体礼拝堂だ」アクセルが扉のむこうの闇に目を凝らして言った。しばらくは全員が神経を張りつめ、暗がりから飛び出してくる獣に身構えるかのように立ちすくんでいた。そんな呪縛を解いて一步を踏み出したのは、この先待ちうけているかもしれないものにたいし、松明を魔除けさながらに差しあげたアクセルだった。光が闇を追いやって、扉の内側で最初に見えたのは冷えた蠟に溺れる蠟燭、それに礼拝堂のひろがる左手に曲線を描いていく壁。やがて彼らは砥石が置かれた理由を悟った。

壁が刃物で覆われていた。

斧、大包丁、剣、短剣——天井から床まで並んでいる。刀剣は松明の灯を映し、星のごとく燦めきながら礼拝堂の奥深くへと光を届けて、闇にひとつの形を浮かびあがらせる。人間ほどの丈があるそれは、己れの顔と同じく見馴れたものだった。神体のしるし、すなわちタウが四人の面前で神体そのものに姿を変えてそこにある。

最初は闇が凝固したように見えたのだが、アクセルが前に進み出ると表面がおぼろに照らしだされ、ある種の金属を鋳で貼りあわせたものであることがわかった。その基部は石床に金具で固定され、床に掘られた幾筋もの深い溝が礼拝堂の端に向かって

放射状に延び、それらがより深い溝と合流して暗い四隅に消えていく。十字架の足もとには枯れた植物が絡み、乾いたひげを巻きつけていた。

奇妙な物体に引き寄せられた四人は、十字架の前面全体が開いて、横木の片端が蝶番で留められ、洞窟の天井に取り付けた鎖で支えられているのを目にした。

タウの内側は空洞で、無数の長い針が突きだしていた。

「これが神体なのか？」マラキ神父が全員の思いを声にした。

彼らはこれまで神体の正体について、エデンの園にあった生命の樹、十字架にかけられて死に臨むキリストが口をつけた聖杯、あるいは十字架そのものであるといった伝説に育まれてきた。だが現実には鋭利な刀剣が並んだ部屋で、このおぞましい物体と相対してみると、アタナシウスは絶対的な信仰と目の前にあるもののあいだに隔たりが生じていくのを感じた。それは彼の願っていたことなのである。シタデルを暗い過去から引き離し、より明るく純粹な未来へと導くには必要なことだった。

「そんなはずがない」とアクセルが言った。「別にあるはずだ。ほかの通路に」

「しかし、ここがいちばん広い部屋で」アタナシウスは答えた。「タウもここにある」彼は内部を見ないようにしてタウに向きなおった。このまえここに立ったときの

暗い記憶が、なかの鋭い針に苛まれていた。

「ここには何かが収められていたようだな」マラキがそう言いながら近寄っていき、厚い眼鏡越しに覗きこんだ。「それにしても、この場でサントウスに説明してもしらないことには、その正体も意味もわかるまい」

「そうだ。彼らがこの山中にいないのは大きな損失だ」アクセルがアタナシウスに面と向かって言った。「われわれは全員で、彼らのすみやかなる帰還を祈るだけだ」

アタナシウスはその嘲りを無視した。たしかにサントウスは彼の一存で退避させたが、信義に基づいて下した決断に後悔はない。「私たちはともに事に当たってきた。これから力を含わせていこう。ここから何が消えたとしても——私たちはこの証人となるために生まれてきたのだ——前に進まなくてはならない」

四人は空虚な十字架を見つめながら、それぞれの思いにふけた。やがてマラキが沈黙を破った。「最初期の年代記には、神体がシタデルを離れれば教会は倒れると書かれている」マラキは三人と面と向かった。その目に浮かぶ懸念の色が、眼鏡のせいでも拡大されていた。「われわれがここで発見した事実は、いかにも悪い前兆ということにならないだろうか」

トーマス神父が首を振った。「そうともかぎらない。たとえシタデルの旧弊な考えが、比喩的な意味で倒れたとしても、それによってすべてに物理的な終焉が訪れることはない」

「そのとおり」とアタナシウスがつづけた。「もともと神体を守り、維持するために造られたシタデルだが、そこからさらに大きな存在になっていった。だから神体があるに存在しないからといって、シタデルの繁栄が終わるとか目的を失うということにはならない。樫の大樹の根元からドングリを持ち去っても、木は葉を茂らせる。忘れてならないのは、私たちがまず仕えるのは神であって、山ではないということだ」

アクセルが一步退き、トーマス、アタナシウスと指を突きつけた。「おまえたちの話は異端だ」

「私たちがここにいることこそ異端だ」アタナシウスは中身の無いタウに手をやった。「しかし神体はなく、サンクトウスもない。もはや私たちは古いやり方に縛られていない。生きるための新たな宗規を選ぶ機会に恵まれた」

「だが、まずは新しい指導者を選ぶことが先決だ」

アタナシウスはうなずいた。「この点については、少なくとも意見が一致した」

そのとき、山中深くから音が上ってきて礼拝堂内に響きわたった。死者のためのミサがはじまったのだ。

「われわれも同胞にくわわらなくては」とトーマスが言った。「それから新しい指導者をいただくまで、ここで目にしたことは口外しないほうがいい——混乱を惹き起こすだけだ」そこでマラキを見て、「年代記について知るのはあなただけではない」

マラキはうなずいたものの、恐怖に目を瞠^{みは}ったままだった。出ていく三人の後ろから空^{うら}るなタウを振りかえり、最後にじっと見据えた。「神体がシタデルを離れれば、山ではなく教会が倒れる」と、他人には聞こえない声でつぶやいた。やがてひとり残されるのが怖くなり、あわてて礼拝堂をあとにした。

リヴ・アダムセンは泳いでいた人間が水面から顔を出すように、突然眠りから覚めた。空気を求めて喘ぎながら、ブロンドの髪を青白く湿った肌に貼りつかせ、怯えた緑色の瞳でしがみつけるもの、触れられるもの、悪夢の恐怖から引き離してくれるものを求めて室内を見まわした。すぐそばで人がささやいたような気がして、その声の主を探した。

誰もいない。

狭い部屋だった。いま横になっている金属製のパイプベッドの反対側にごついドア天井の一角に固定された古いテレビ。白いペンキが病氣のように黄ばんで剥がれかけた壁にはまる一枚窓。ブラインドは下りていたが、明るい外光のせいで、磨けば光る素材に鉄格子の輪郭がくつきり投影されている。リヴは気を鎮めようと深呼吸をひとつして、病氣と消毒の匂いを嗅いだ。

そこだ思いだした。

わたしは病院にいる——でもどうして病院にいるのか、どうやって来たのかわからない。

長く深く、穏やかに呼吸をくりかえす。胸の鼓動は乱れたまま、耳のなかのささや

きがあまりに大きく差し迫って聞こえるので、また室内を確かめずにいられなくなる。すっかりして、とリヴは自分に言い聞かせた。血が血管を駆けめぐっているだけ。ここには誰もいないから。

眠りに落ちるたび、同じ悪夢が待ちかまえているような気がした。何かを語りかけてくる漆黒の夢では、痛みが赤い花のように開き、ある形——T字の十字架が不気味に立ち現われる。しかも闇には彼女のほかに大きくて恐ろしいものがある。それが動きまわる音がして、地面を揺らしながら近づいてくるのだが、闇からその姿が出現するかという瞬間にはっと目が覚めてしまう。

リヴはしばらくのあいだベッドに横たわり、パニックを抑えようと呼吸をととのえながら、憶えている事柄をたどっていった。

わたしの名前はリヴ・アダムセン。

〈ニュージャージー・インクワイアラー〉紙で働いている。

わたしはサミュエルの身に起きたことを調べていた。

ふと心に浮かぶひとりの修道士の姿、暗い山頂に立って身体で十字の形をつくり、その姿勢で前のめりに落ちていった。

わたしは兄の死の理由を知ろうとここに来た。

もどってきた記憶にともなうショックで、リヴは自分のいる場所を思い起こした。

ヨーロッパのはずれに近いトルコ、古代都市ルイン。そしてサミュエルが形づくった
Tauは神体の象徴で、何度も夢に出てきたのと同じ形。それは夢でなければ現実だ。

意識がはつきりしてくると、自分がその形をシタデルの闇のどこかで見て——神体^{サクリファクト}を目にしたことに思いが至った。その記憶に焦点を合わせて鮮明なものにしようと試みたけれど、視覚の縁にあるというか、どうしても出てこない単語みたいに捉えどころがない。甦^{よみがえ}ってくるのは耐えがたい苦痛と……閉じこめられたという感覚だけ。

視線をやった重そうなドアに鍵穴があることに気づき、ドアのむこうにある廊下を思いだしていた。数日まえにそこを行き来する医師と看護師を見た。

あれから何日？ 四日？ 五日かもしれない。

壁際に寄せた二脚の椅子に座る男たちも見た。ひとりは濃紺の制服を着た警察官、見馴れない記事を付けていた。もうひとりも制服姿、黒い靴、黒いスーツ、襟に白く細いラインのはいつた黒いシャツ。ほんの数メートルしか離れていないところに座っていた、その男のことを考えるとふたたび恐怖が湧きあがる。ルインの血塗られた歴

史に通じているだけに、自分が危険にさらされているのは理解できた。もし神体を見たと知れたら、彼らは口を封じようとするだろう——兄を黙らせたように。そうやって長く秘密を守ってきたのだ。死人に口なし——月並みな言い方ではあるけれど真実だった。

ドアの外に立って寝ずの番をしている司祭は、リヴの悩める魂を救ったり、早い回復を願って祈りを捧げているわけではない。

そこにいるのは彼女を監禁しておくため。

彼女の沈黙を確実なものにするためだった。

立ち読みサンプル はここまで

四一〇号室

同じ廊下のドアを三枚隔てた病室で、キャスリン・マンが糊^{のり}のきいたシングルベッドという監獄に寝かされていた。枕の上にひろがるその豊かな黒髪は、しだいに暗くなっていく嵐を思わせる。病室の暑さのなかでも、キャスリンは顫^{ふる}えていた。医師に